

弘誓の強縁を謝しつつ

畏敬せる伊藤龍雲師足下

講演から講演に、あわただしい放を結けている私は、御無沙汰ばかり続けています。心は互に相通いながら手紙一本書かぬ私をお許し下さい。法兄のことは常に心にも思い口にも出します。それなのに手紙は一本も出さぬのであります。

しかしそれは懈怠ばかりでもないのです。私は近頃全く手紙を書かないのであります。以前は半日に数十通も返事を出したりしたことがあります。今の私はとてもそんなことは出来ないであります。いい加減な情を盛つたり、感激もない手紙なら五枚十枚書けないこともありませんが、それが一体何になりましょうぞ。

一昨日、久しぶりに静かな心持ちで手紙を一本書きました。それを私の側で読んでいた臺愚狂君は眼に涙一ぱいたたえていました。もちろん私も眼にこそ涙せざれ、魂の底は涙にうるんでいたのであります。

私は涙を通さずに文を綴って人に贈ることをやめたいのであります。私の魂がその人を対象にして、全体的に動かされて、全体が打ちふるうのでなければ、どうして力がありましょうぞ。そうなると手紙を書いて送るべき人がないのであります。お送りすることが出来る人と、書かねばおれぬ心が一体になった時、私は初めて涙しつつペンをとり得るのであります。

小河内という村に平岡というじいさんがいます。八十にも近いじいさんであります。じいの唯一の願求は私とあうことであります。申すまでもなく、じいは念仏の子であります。否むしろ念仏そのものであります。世の中には自分は傲慢なる我執に陥つたり、久遠の無明にさめずして、念仏をかなたに躍らして、自己の勝手な日暮しの弁解に如来大悲を弄んでいる者があります。けれども自己そのものが法蔵の願心に躍動している者は少いのであります。こうした若存若亡の二十願の世界にすむ者にどうして真の喜悦がありましょう。

しかし北次じいは念仏そのものになっていきます。じいは衷心私を慕ってくれます。私とその地方に講演にゆけば側をはなれぬのであります。しかし私は今ここでそのじいと親しさぶりを語ろうと言うのではないのであります。唯じいが腰にさげている煙草を入れる「ドウラン」の中には何時でも一枚のはがきが入れられてあることを申せばいいのであります。もちろん私がじいに書いて送った一枚のはがきであります。別々に大したことが書いてはないのでありますけれど、じいのためには大切な宝であります。そうしたじいは書いて送った私よりも、もつと幸福であります。私は手紙一本すら軽々しく書けないことを痛切に思うのであります。真の意味で私の心持ちを言えば、手紙が書きたいのであります。書きたい書きたいと心は燥焦つています。しかし私にはそう沢山は書けないのであります。手誓くことすら私には尊い往生への一足であります。私は今日、はしたなくも法兄に対して書かずにはいられなくなつたのであります。

龍雲法兄足下

私は昨日まで戸河内村松原にいたのであります。直ちに御想像下さるでしょう。妙好人△△校長御夫婦の御世話で三晶の講演をしたのであります。私たちにとつてどんなに幸福な三日間であつたかは貴師には想像のつくことだと存じます。昼は稲刈りがはじまりかけていますので、あまり多数とは申されなかつたのでありますけれど、夜分は大変な聴衆でありました。特に彼の地の知識階級の人たちがよく集つてくれたのはうれしいことでした。

この度私が彼地に行つたことは、御二人の長い長い間の念願でありました。幾度も延び延びして終に実現したのであります。校長先生は勤務があります。先生の誠意は奥様の活動の上に顕れ、奥様の熱心は温い空気をつくつて私どもを待つていて下さつたのであります。一体私がこの求道に燃ゆる御一家と知ることの出来たのは、法兄の御導きであります。奥様は常にそれを喜んでいます。「一度住岡君にあつて見なさい。」との御言葉が昨年夏、私を校長先生の前任地に、私と、御一家とを運んだのであります。一度会うや別れることの出来ぬ間柄となつてしまつたのであります。三日間、又しても又しても貴師の話ばかりが話題にのぼるのであります。奥様と語つている時、ここにいぬ法兄と私どもは一つでありました。

この御一家がいとしい長男の御令息を失つて心の傷の新しい日、計らずこの御一家の前に、久遠の法燈を捧げて表れたのは貴兄でありました。そうして大菩提心はゆりおこされたのであります。御一家は貴師を真に信じていられます。

伊藤法兄足下

世間の大部分のいわゆる同行たちは、人格から人格に流れる血潮にのみ真の宗教があることを忘れている人が大部分であるようであります。これを極端に言えば、「聞いて見てやろう」という態度や、自分の全的に信ずることの出来ぬ人の説をぬき聞きをして、真の世界に出づることが出来るように思つています。だから今のいわゆる同行は、常に寺院に参集して、一生を聞法生活につかひながら、彼らは終に真の意味において一人の師匠を持たぬのであります。仏の前に自己を投げ出すとは、先、信ずる善知識の前に自己をなげ出すことであります。「阿弥陀さんと直きの約束」ということを彼らは常に申しつつ、その意味をはきちがえているようであります。

善知識気取りをして高くとまることはもちろん呪われたる化城であります。往相廻向の往生人たることを忘れたものであります。しかし求める我は、どこまでも、謙虚に先哲のみ教に信順しなければなりません。大悲に聖徒するには大悲を信ずる善知識を先に与えられねばなりません。人を信ぜずしては法を信ずることは出来ませぬ。釈尊の仏格、親鸞の人格を否定したところには真宗はないのであります。親鸞は私たちにとつては唯絶対なる師匠であります。祖聖親鸞を信ずることはいよいよ切に、聖人の人格を讃仰すること益々加はる時、我が精進求道の心は深められて行くのであります。

異に信ずることの出来る師匠を恵まれた人ほど幸福はありません。倉田百三氏は愛を分類して、母子の愛と、夫婦の愛と隣人の愛だと言いました。而して師と弟子との愛は隣人の愛であります。母子の愛にも男性女性の愛にも自己中心の興味が主と

なつて、相手の運命が忘れられてくるのが容易であります。けれども隣人の愛は、取らず奪わず、接触することによつてお互の運命を育ててゆきます。まことに、み法によつてつながる愛こそは、隣人愛の最も深刻なるものでありましよう。

求道心は決して本能的盲目的五欲からはおきて来ませぬ。願往生心は、それがそのまま度衆生心であり、願作仏心であつて、法欲は、人間の本能的欲よりも本質の異なつた高い世界から生れて来たものであります。求道に精進している人の姿は、そのまま法蔵の願心に目覚めている姿であらねばなりません。聖欲に動く心が交渉する時、そこに法の相続がはじまります。一点の濁りをもゆるされませぬ。説く者と説かれる者とは、久遠の仏心に目覚めさせられ、聖域に魂が飛躍するのであります。説く者は積極、聞く者は消極でも、結局は一つであります。説く者の背後にも、聞く者の背後にも、如来は動きたもうのであります。もしそうでない時には、法を説いて、法を汚し、法を弄び、あるいは生きたもう如来の血を人の概念的遊戯によつて殺す者であります。

まことに信じきることの出来る師を持った者の幸福を思います。真に信じることの出来る、求道者を与えられた者も亦幸福であります。信ぜられる者、必ずしも尊いとは言えませぬ。けれども素純に教化の前にひざまづくことの出来る人は尊い人です。奥様は幾度となく、信ずることの出来る二人の善知識を与えられたことを涙して喜んでいられます。長男の死にあつて、無常に覚まされたみ心は一途に求道のためにつき進みました。奥様が貴師のあとを追つて、求めきられた有様、時に大雪の中を、あるいは病氣の中を、遠い道を、何物にも碍げられずにつき進まれました姿は、真に尊いものであります。

伊藤師足下よ

華嚴経を開けば、先、第一寂滅道場会にはじまり、普賢菩薩が如来浄蔵三昧に入つて、如来眼に映ずる宇宙法界を広説し、その説法がおわるや、世尊は寂滅道場を離れずして、第二会たる、それより東南三里の普光法堂へと移りましたまい、ここでは文殊が主となり、覚首賢首等の諸菩薩によつて発心を勧められ、信徳が讚美せられてあり、次いで世尊は、刀利天宮に移りましたまい、法慧菩薩は、ここで理解の法を説き、更に第四会、夜魔天宮会では金剛幢菩薩が利他廻向の道を開説し、第六他化自在天宮会では金剛蔵菩薩が真証の生活を明かにし、ついに世尊が再び普光法堂にかえりましたまいは、普賢菩薩が華嚴三昧に入つて、解行向証の内容を宣説した。而して第八、重閣講堂会におわります。舎衛国、祇園精舎の重閣講堂にたまひし世尊は師子奮迅三昧に入りて菩薩たちを警覚せしめたもう。まことに重閣講堂会の本末二会において、先、本会では祇園精舎なる大莊嚴重閣にあつて五百の大菩薩と俱であります。全ては如来の境界を念じて、世尊の之を顕現せられんことを念じたので、世尊はこれを知つて大悲によつて獅子奮迅三昧に入りたもうや、重閣講堂は、廣大無辺なる浄土となつた。そこへ新たに十方より無数の菩薩は集つて来ました。それらの菩薩たちは順次に世尊の威徳を讃仰します。時に彼の普賢は大衆のために、広く獅子奮迅三昧の内容を開現しますと、如来は眉間より光を放ちて、一切法界を利益したもうのであります。最

後に文殊は仏の神力を受けて、如来の大功德を歌歎します。まことに、木会は普賢説き、文珠讚嘆して久遠大理想の如来を顕現しています。

かくして成道正覚の釈尊はあまりにも輝しいものであり、大理想であり、大光明であり、大莊嚴であります。もし華嚴経がこれでおわるならば我等は唯その光に眩惑されて、失神しておわるでありましょう。我等の現実には、世尊の威神の前には、あまりに暗き小さきものだからであります。しかし果してその末会いわゆる入法界品においては、彼の善財童子の求道の生活を示すことによつて、菩薩道は開顕せられて来ました。仏教に親しむ者にして、善財童子の何ものであるかは議論されてあることながら、本会において久遠の大理想の如来として現されたる釈尊は、人間として、現実の人として表された時、それが善財童子であらねばなりません。善財童子は、先、文殊菩薩に遇うてその求道の志をのべ、一切を告白し文珠の徳を讚嘆して教えを乞うたのであります。文殊はその発心をよろこび、その志願を讃えて功德雲比丘を訪ねよと教えます。

これより童子の巡礼するところ、一百一十城、その智識五十三人、比丘、比丘尼、婆羅門、仙人、王、童子、童女、外道等あらゆる種類の人に道を乞うていることは、法兄の御案内の通りであります。童子は、ついにこれら五十三人智識を経めぐつて最後普賢が金剛藏道場にあつて蓮華藏師子のみ座に、自在神力をあらわせるを見たのであります。普賢にあつた善財童子は無量の三昧を体得しつつ、大菩薩道を顕現成就する身となり、更に普賢の長時永劫の修行について開き、その威徳を聞き、ついに童子は普賢によつて、大願を極め、法界一切の諸仏と等しかるべきものとなりました。

菩薩道を開顕するために物語られたるこの善財童子は、それが釈迦魂の表徴でなくてはなりません。仏格の威神功德を讚嘆し、宣説せる代表的人物は、普賢と文珠二菩薩でありました。まことに正覚成就の久遠の大理想たる如来は、この二菩薩の言表歌嘆によつて開顕せられます。しかるに末会における善財童子も、その求道の旅において、文殊にはじまり、普賢におわつてゐることは、面白い意味深い表白であらねばなりません。親鸞の「釈迦如来の御善知識は一百一十人なり、華嚴経に見えたり。」の御言葉をもつて、諸先生たちが、この間の消息を語つたものだとするのは無理からぬこととも思はれます。実に如来の現実における全的顕現は菩薩道であらねばなりません。

龍雲師足下

仏教は永遠に精進努力の菩薩道をおいて他に何がありません。人類は自己の有限におどろいて、無限なりと云わるる仏格を永遠の彼方にながめて、徒らに長嘆息して失望してしました。けれどもこれは眞の仏教ではなかつたのであります。理想と現実とを切りはなして、理想の広大さと現実のみすばらしさに泣いていたのであります。しかしながら法華経においては、長者の許をはなれたる流浪の窮子であり、火宅を火宅とも知らずに遊戯せる子供であつた私たちは、ついにそれにおわることが出来なかつたのであります。

一心精進の求道の魂に動かされていく現実目覚めの子となつたのであります。善財童子は求道の一步、文殊菩薩の前に

「私は長い間、迷いの域に、憍慢の垣を作り、悪趣の門戸を構えて染愛の深い塹をめぐらしていました。愚痴の暗に覆われ、三毒の炎を燃やし、悪魔を君主として、愚かにも其所にすんでいたのであります。貪愛にしばられ、詣曲つた心で正行をやぶり、疑いに智慧の眼を障えられて、あらゆる邪道にさまよっていました。嫉みの心に縛られて、餓鬼の苦悩に陥り、生老病死に支配せられて、愚かにも六道輪廻をつづけていました。」

これこそ素純に道を求めてゆく善財童子の一切を文殊の前に投げ出した言葉であります。まことに道を求める者は、その信ずる知識の前に一切を投げ出して善財童子の如く、「あなたは円満無上の慈悲と、日光の如き清浄の知恵とで、よく煩惱の海を消しつくしたもうことが出来る。願わくば少しく顧みて、私を觀察して下さい。」と求めずにはいられませぬ。

世の多くの同行は、自己の全部を投げ出して教えをまつことを恥とするのであります。まことに都会よき一部分を弁じ述べて、ただ叱られないこと、嘲笑せられないことを願うのであります。一切三宝の前に自己を偽るものにどうして道が開けましようぞ。一切を投げ出す心、一切を告白する心は救われる心であります。私は話を先の問題にかえさねばなりません。彼女(奥様)は、恵まれた人であります。多くのいわゆるの同行が説教僧の話を聞きとり聞きぬいて、極楽参りの切符だと彼らが信ずるところの信心をこね上ることに腐心し、やつれつつ、空しく一生を費すのにひきかえて、彼女は一途に信ずる知識の胸ぐらに突進して彼女を全的に投げ出して、ついに真の念仏者となつたのであります。

彼女と法兄とが道を語る時は、常に私の名が浮ぶのであります。私と彼女とが大悲を相続する時にはしばしば、「順正寺様」の名が出るのであります。私は貴師を尊敬するのであります。貴師は私を愛撫せられるのであります。まことに善財童子の求道が文殊と普賢に終始するが如く、彼女の血みどろなる求道生活には貴師と私とがなくはならぬものであります。言っておかねばならぬことは、私がかく言うことは決して我等を文殊、普賢の高さに比する尊大の致すところではありませぬ。唯、如来が彼女をかくまで鮮かなる求道精神の聖女として立たしめたもうために、貴師と私とがその前に法燈を捧げねばならなかつた不思議なる因縁をよろこび、偶然にも、善財童子のそれと一緒に味うことの出来たのを感じせずにはいられぬのであります。

多く聞法者に説教し、講演する我々は、とかくその聴衆の多いのに乗つて痛快を叫ぼうとします。然しながら、真の知己は断じて多数ではあるべきではないのであります。信じられんことを求め、信じない者を侮るほど傲岸な魂の持ち主になろうとは存じませんけれども、一人でも真実の道に誘いたい私どもは、真に信じあうことの出来る聞法者を得ることは嬉しいことであります。

伊藤龍雲師足下

一分のすきもない求道者を見ては、合掌せずにはいられませぬ。模倣でもなく、遊戯でもなく、研究でもなく、行かずにはおられぬ道を、真一文字に走りつづけている者は、それが直ちに如来の願心に動かされてはいる者だからであります。遠い道を、暑い日の中を、寒い雪の中を、求道のために精進している者こそ、それが輝ける未来を有する童子の心、普賢文殊を求めている善財童子の心でなくて何でしょう。

祖聖親鸞は和讃において、「智慧の念仏得ることは、法蔵願力のなせるなり……」と讃仰していられます。まことに大無量寿経においては、如来心の表現は、法蔵菩薩の願心であります。無限絶対なる如来心の有限なる現実への顕現は四十八願であらねばなりません。如来の生ける活躍は、菩薩発心の一心を置いて他にはないのであります。まことに久遠の如来の大悲は無限の生死界に廻向表現せられて法蔵の願心となりました。法蔵菩薩の本願は例の四十八願の大願であり、それはひいて第十八願念仏往生の願に要約さるべきものであります。第十八願に誓われたる、至心、信樂、欲生我國の三心は、如来久遠の願心であらねばなりません。如来の如来たる願心であつて、それがそのまま菩薩の本願であります。三心が決して、衆生の心ではなくて、一点微塵も汚れなき如来心の表現であることは、聖人が信の巻に「至心とは如来の眞実心である。信樂とは、如来の満足大悲円融無碍の信心海である。欲生とは如来の一切衆生を招喚したもう勅命である」と詳かに断言せられていることによつて明かであります。

天親論主のいわゆる、「一心」とは、三心の合一であり、端的なる如来心の表現であることは、三心一心の問答で明かであります。ここまで思いをたどる時、久遠の如来心はついに廻向表現されたる眞実の一心であります。一心こそ、菩薩精進の全的表現であります。法蔵菩薩は一心であります。菩薩の一心は、如来心の躍動であります。ここにおいて私どもはどうして一心に尽十方無碍光如来に帰命せずにはいられましようぞ。私は先に、求道の人を合掌礼拝せずにはいられませぬことを申しました。彼は実に如来の表現たる一心に動かされている者だからであります。今更に法蔵願力の活躍を彼の上に見るからであります。彼こそ彼岸の招喚に召されている者だからであります。

華嚴経においては久遠大理想の釈尊は、現実求道の善財童子として表現され、我が大無量寿経においては、諸仏乗托の本地なる久遠実成の仏心を現実の生死界に顕現して法蔵菩薩の五劫永劫の願心成就として説かれました。まことに釈尊の切なる衿哀憐愍にふれる時、我等凡夫を仏陀撰取の光悦に導きたもう方便、涙せずにはいられぬのであります。実に釈尊は常に弥陀の願海に乗托して出現して、久遠の仏心に信願して成仏せられるのであります。而して五濁悪世に沈迷せる我等も亦彼の一心なる法蔵願力に乗じて、永遠なる求道の衆生たることが出来るのであります。ここに於いて合掌して念仏せざるを得ぬのであります。

畏友龍雲法兄足下

救済せられたとは、我等の久遠の迷執たる樂をおわんとする功利主義より出でしめられることでもあります。まことに、現在の眞宗の行者たちの大部分は、百味の飲

食、七宝莊嚴の浄土に安逸を希う功利の徒であります。蓮師はすでに、聞書の百二十番に……「信をとらんずると思う人なし。されば極樂はたのしむと聞きて参らんと願いのぞむ人は仏にならず、弥陀をたのむ人は仏になると仰せられ候」とて、人間久遠の迷執を打ちくだいていられるのであります。然るに、彼らの多くは久遠の我に覺め、流転の我を見出すことをおそれて、何等の否定もなしに、その手に極樂往生の切符を握らんとするのであります。彼らは求道に立ち上ることよりも、未来浄土の約束に急なのであります。願力に躍動せずして感激に眠ろうとするのであります。かくして彼らは三十年五十年寺院の階をすりへらして、永劫の地獄に沈むのであります。是れ徒らに学年末の優等賞状を得んことに忙しくて、現実の不成績をゴマ化さんとする学生と同じであります。

ここに於いてか、貴師の同行に対するや、峻烈骨をさし、一徹塵の自力に安住せる者を打ちくだいて容赦せぬのであります。これ決して不親切にあらずして、真の同情であり、親切であります。しかし金剛堅固ならざる求道者たちは、その自力の信心の打ちくだかれんことをいとい、法兄の叱咤におそれ逃げるのであります。しかれどもこれは真に師の衷心を知らぬのであります。師を真に知るや到底去り得ないのであります。

貴師と私とはその正反対かも知れませぬ。私は個人としての彼らには極めて柔かであります。これも亦法兄と私との面白き対照であります。一心に求めて止まぬ同行を見た時、私は同情に過ぎるほど彼らにひきつけられます。されば貴師は破壊の人であり、私は建設の人であります。法兄は自力を打破する人であり、私は理解説伏に7 急ぐ男であります。法兄は自力執心の人への鉄槌であり、我は罪惡に泣きつつ、地獄一定の姿を見出さしめることに我を棄てさせようとしています。貴兄は智慧門の把持者であつて、私は弱い慈悲門に生きさせられる人であります。

彼女は貴師の厳しき教化に鍛練せられつつ、終に法兄の切々たる慈悲により久遠の智眼はひらかれたのであります。彼女は求道の旅路に、期せずして貴師と私との表れたことを如衆に感謝していられます。名利人師の慚愧を忍んで、今暫く第三者の地位に立つてこれを言う時、朝夕仏前に拝跪することに二人の先達の恩に感佩する彼女の幸福を祝福せずにはおられませぬ。

伊藤龍雲長兄足下

まことに多くの聞法者たちによって誤まれたるものは本師善導の二種深信であります。

「二には、決定して深く、『自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫より己来常に没し常に流転して、出離之縁有ること無し』と信ず。二つには、決定して深く、彼の阿弥陀仏の四十八願は衆生を撰取したもう、疑無く慮無く、彼の願力に乗ずれば、定んで往生することを得』と信ず。」

思いをひそめて本文を拝読する時、機の深信において、明かに輝ける文字は「現に」の一字であります。まことに久遠の我に沈思する時、現に出離の縁なき流転の常没の

凡夫であり衆生であります。又かの阿弥陀仏の具体的表現たる法蔵菩薩の本願を聞く時、疑いなく慮なく往生を得らるのであります。

まことに我等は十九願においては、自称善人であり、聖者であります。二十願の世界は哲学者であります。何人も善人であり、議論に日暮るる哲学者であります。されど真実に自己にかえり、大否定のどん底に我を見る者はしよせんは、その全部の行為の価値と、徒らなる議論とを棄てて、真実流転の我に目覚めねばなりません。如来は断じて善人聖者の胸中にも、議論に暇を有する人の胸中にも、その永劫のみ姿を表さぬのであります。彼は実に衆生を呼びたもうのであります。衆生をうみ、衆生を求めているのは久遠の仏心であります。

されば法蔵菩薩の願心は、永劫流転の衆生、常没の衆生の上へのみ動きたもうのであります。念仏は、生死界に影現したもう如来の名告りであります。決して念仏は聖者や哲学者の胸には生れたまわぬのであります。実に我等は如何なる時も、現に出離の縁なき衆生であります。又如何なる時にも往生人であります。さめていよいよ衆生であり、見つめていよいよ常没の凡夫たる我が、真にたすかる身であり、救われてゆく身であるとは、不可解不可説不可思議であります。されば親鸞聖人は、「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をば逐ぐるなりと信じて……」とその信仰を表白せられました。

然るに世の同行たちは、我が機に目をかけなどの言葉を楯に、「機を信ずる」かわりに、「機を棄てて」かえり見ないのであります。ここに言う機とは、煩惱成就の機であります。善導は機の深信をこそ説け、その何処に機をほつてしまえとは言つたではありません。まことに彼らが「地獄一定である」とは自己をかたづけけた言葉であります。未来の地獄を恐怖せる言葉であつて、現実の我をみつめた言葉ではないのであります。尊き我に、安価なるレッテルを貼りつけてかたづけけた言葉であります。されば永劫流転の我をよびおこし、常没の衆生たることを知らされることをもつて徒労だとするのであります。「我が機の悪いことならよく知つてゐる。地獄行きのことなら知らしてもらわなくてもよい」と言うのであります。それこそ、あさましい、功利より外に目のない哀れさであります。捨てよとの機、いわゆる捨機托法の機は、常没の凡夫たることに徹底することによつて棄たるのであり、罪悪生死の我を知りつくして、終に宿業力の一筋道を、いやでもすきでも歩まねばならぬ自己を内観しつくした者のみが、如来によつて棄てしめられるのであります。けだし如来の鋭き智慧光は、我等が久遠の迷執に打ちかつて、ついに絶対に浮ばれぬ凡夫の相を見せ、微塵の自力をも打ち破るのであります。しかるを世のいわゆる聞法者の大部分は、信ぜよの機と捨てよの機とを取りちがえて、機をはなれよとの言葉を乱用して、信ずべき機を、「地獄にゆくことはわかっています。」とて、放つてしもうているのであります。まことに親鸞の功績は、真実の我を発見したる「親鸞におきては」の言葉であります。常没の我を見出した千載悲泣の聖者を拝跪せずにはいられませぬ。流転の衆生こそ、如来の活躍したもうものがあります。その自己を棄てたところに、どこに救済がありましたましようぞ。

私の最も不思議であることは、猫も杓子も、「地獄者だ」と言っていることであり、誰も彼も悪人の名を濫用していることでもあります。そうたくさん地獄一定だといえるほど機を信ずることに徹底した者はあり得ないはずであります。彼らは悪人だと言いつつも、それはただ極楽参りたらんとする時の用意にすぎぬのであります。流転常没の衆生は必ず如来願力に動くのであります。自己を問題として求道に走らねばなりません。誰か死を眼前に構えつつ、永劫流転の我を抱いて長夜の眠りをつづけることが出来ましようや。地獄者と言いつつも真に目覚めざるが故に、彼らは終に求道の白道を走らぬのであります。

「昨日までは常没の衆生であつたが、今日は浄土参りの身である。」とは善導は言わなかつたのであります。彼は今日、今、現に出離の縁なき凡夫であると言つたのであります。かくて法蔵の願力に動く身、如来の心光に摂取されたる我は、「現に凡夫」であります。常に、現に、度しがたき凡夫であります。いよいよ度しがたき罪悪生死の凡夫なることを知りつつ、救われたい、参りたいの願求を棄てて、光胎に救われてい

ることを深信するのであります。まことに浄土と地獄の道は一つであります。いよいよ浮ばれぬことは、いよいよ救われるに疑いなきことでもあります。救われたとは煩惱の一塊が仏心と一体であるとの自覚であります。覚めることなき浮ぶことなき彼と、覚めきりたもう仏心とが、二つの道を進まずして、二つが一つになつて一つの道を進んでいることの体験であります。かくして若不生者のお誓いは、永遠の衆生を本願海に見出すのであります。救われたとは、竹に木をついだが如きものではなく、二種深信は、それが前後の關係によつて結ばれるのではなく、二つは二つのままに一つであらねばなりません。この大不思議は唯々如来のみ胸にのみ説き得る不思議であります。

噫。かくして常没流転の衆生界に実現せらるる聞其名号信心歡喜の一念こそは、そのまま仏の唯一願心の顯現であります。如来の因果はそのまま衆生の因果となり、衆生の因果はそのまま如来の因果であることにあきれるのであります。

「阿弥陀如来の三業は 念仏行者の三業と

彼此金剛の心なれば 定聚のくらいにさだまりぬ。」(和讃)

如来の願心において衆生の願心なく、如来の信において、衆生の信なく、衆生の帰命の一心はそのまま仏の唯一願力の顯現であらねばなりません。

伊藤龍雲師足下

私は夜を更して書きました。最早ペンをおかねばなりません。私は彼の尊敬する法師の熱き誠心によつて、整えられ、清められ、飾られたる念仏道場に四日間を暮し得させられたることを深く感謝しつつ、今更、貴師にこの草々の文を送つて、一夕の清閑に供するものであります。与えられたる価値世界の光悦にむせびつつ、幾度か如来に合掌せざるを得ないのであります。私は法師が健在に益々本願一実の大道を精進していなさることを告げ、何時か又再会の折を得てせつかくの御法縁をお垂れ下さらんことを切望して筆をおく者であります。

(九月三十日夜加計町にて)